



歴史は好きではない。歴史というのはその時の権力者、後世の都合の良いように解釈される。歴史的な遺跡を訪れても想像力のない私は、苔むした石垣から、または眼下の場所から在りし日の殿様やこの地での戦や庶民の暮らしを思い浮かべることができない。

そんな私ですが、最近は磯田道史さん司会の「英雄たちの選択」などの歴史番組もよく見ている。磯田さんは2013年の朝日新聞にコラムを書いていたときから注目していた。津波の文献などを調査研究したいとのことで12年から16年までは浜松在住されていた。ちょうど、私の息子が浜松に住んでいて、当時、ここに磯田先生が居るんだと静岡文化芸術大学の前を歩いたことがある。

磯田さんは庶民の書き物からいろいろ発見して歴史を見る目を変えた。新しい発見とともに、歴史に興味のない者にもわかりやすく親しみやすく解説してくれる。小学生の頃より考古学や歴史が大好きで、先祖が残した戊辰戦争の記録「御奉公之品書上」を読みたく古文書を独学、15歳のときには読めるようになったという。古文書というのは、まず、字そのものが読めません。漢字かな交じり文であっても、漢字がほぼ草書体なので、ふつうは読めない。書道を20年くらいやっている私は、楷書、行書、草書の勉強もしているが、草書体になると漢字のサンズイもニンベンもギョウニンベンも似たような縦1本であるからして、前後の文字も見ないと読めない。そして、文法である。独特の文語体で書いてあるので、文字が読めても意味がわからない。

そういう困難を乗り越えて、磯田さんは若いときから古文書をスラスラ読めるんだって。しかし、読めたからといって、それが面白いかどうかはやはり個人の差でしょう。面白からこそ研究までたどり着く。歴史に残る有名な書き物なら、博物館に展示される価値

あるものになるだろうけど、磯田さんは終戦時の宮内省主馬寮職員の日誌、「殿、利息でござる」の元の「国恩記」、明治天皇皇后お付きの日誌、江戸本郷の質屋の日記などの膨大な資料を読みつくす。その中から貴重な記録は数行。根気がなくてはとても読めない。

29歳から45歳まで浜松に居た家康はどんな顔をしていたのか。浜松時代の家康は若くて、弱小大名のため城も小さく、駿府城や久能山東照宮のある静岡市に比べると家康の痕跡がない。それで浜松としては若い家康をイメージして静岡に対抗、今や、ゆるキャラの「出世大家家康くん」は大人気。うちの孫たちもツーショットしている。

浜松の初詣のお勧めは引間城本丸、現在の元城町東照宮はパワースポットである。秀吉も家康のスタート地点であり、ここから出世して社長となった人物が何人も居るらしい。本田宗一郎もかつてここに住んでいたとか。

研究のためには引っ越しも辞さず。水戸の古文書や史料を読みたいがために茨城大学の助教になって水戸に8年居住。なじみの古書店から掘り出し物が見つかったと連絡があれば、新幹線で京都に駆け付ける。誰も買わないような古い資料などを数千円で買って、わずか1行の記述に意気揚々の磯田さん。

「豊臣秀頼は秀吉の実子か」全国駆けずり回っていた秀吉、秀頼の誕生日から逆算して、この地この月に淀殿と同道していなければならぬはずが、確たる証拠となる記述はたった一つ。もし、その記述が別の側室と勘違いされていたら…など様々な項目が面白く列記されている。

幕末の改革の英雄といわれる吉田松陰は、「蝦夷を開墾してカムチャッカ・オホーツクを奪い、琉球を論じて、朝鮮・中国を攻める。満州を割き、台湾・ルソンを収めよ」と「幽囚録」で提言している。これは日本が大戦に進んでいった帝国主義そのものなのだ。私たちが持っている歴史の認識とはいったい何なんだろうと思わされる。

『日本史の内幕』 磯田道史 中公新書